

働きつつ学び研究することはセルフマネジメント

井手 芳美

1. はじめに一働き学び研究するきっかけ

2009年12月、名古屋学院大学大学院で開催されたシンポジウム「“働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣」に参加し、十名先生に出会ったことから働きつつ学び研究することはスタートする。当時筆者は、名古屋学院大学大学院の博士後期課程の入学を迷っていた時期であり、そのことを修士課程でご教示いただいた庵原孝文先生（元名古屋学院大学客員教授）にご相談するなかで、十名先生をご紹介いただいた。

シンポジウムでは、高い志を持ち、社会人が働きつつ学ぶことの意味を問い直し、研究者の道を探求することに共鳴した。そして、十名先生から「大学院で学べるタイミングは、いつでもあるとは限らないですよ」とアドバイスされ、その言葉に背中を押され、大学院後期課程の進学を決めた。

本稿では、博士論文を作成し学位を取得するまでのプロセスを振り返り、その思いや社会人研究者の魅力を整理する。さらに、学位を取得し8年経った今、働きつつ学び研究することは、セルフマネジメントであるという考えに至っている。それらを含め、働きつつ学び研究することを目指す社会人研究者のガイドになればと願う。

2. 社会人研究者の魅力

筆者は、2002年～2006年までの3年半、中国上海の日系コンサルティング会社で駐在経験をした。「違う文化、習慣、価値観のなかで、同じ職場で働く者同士、どうしたら組織が機能し、上手くいくのであろうか」そんな問題意識を持って仕事をしていた。博士論文を作成する上でも、その問題意識を出発点に取り組んだ。

中根千枝（1967）によると「日本の社会構造は、場の共有を基本に、個人よりも小集団を単位として枠内で機能する縦型ネットワーク社会である」。場による集団の特性として、人と人との関係性を優先する。それが、ある局面では集団としての組織の強みになるが、間違った方向へ進むと、組織の信頼や個の創造性、人権等も阻害する弱みにもなる。そのタテ型ネットワークがはらむ偏りを打開するには、場の共有の質的変革を図ることである。この質的変革を図る手がかりとして、経営理念に着目したのである。

経営理念は、会社の存在意義であり、経営の土台をなすものである。その経営理念を価値共有の核として経営、人づくりを行うことが、クローズドな枠からオープンな枠へ、また、一人ひとりの人材の持つ能力や個性を最大限に生かす鍵になるものと考え、研究を進めたのである。

先行研究の検討、現地調査、研究の独自性などを提示し、博士論文を完成させるまでには、5年の時間を要した。社会人研究者は、博士論文作成だけに集中できない。働くことと研究

することの両立が求められる。その時間管理が容易ではないのである。

さらに、その間、筆者は勤めていた会社からのリストラ、母の介護、経済的な厳さなど困難なことにぶち当たった。しかし、これらの困難を乗り越えられたのは、働きつつ学び研究する楽しさや面白さ、知的好奇心が満たされるワクワク感があったからである。例えば、リストラにあった頃は、イギリス、日本、中国の産業革命時に劣悪な環境で働かされる労働者の研究をしていた。「場所も時間も違えども、何も変わっていないのではないか」なんともいえない不安や怒りを抱えつつ、研究することで解を模索した。さらに、起業した頃は、日本の資本主義を築いた渋沢栄一や森村市左衛門の経営について研究をした。自分の会社よりも社会のためにどう役に立つかを考える経営者の考えに触れるなかで、経営の本質とは何かを考えた。

社会人研究者の強みは、自らの現場で感じた問題意識を深く掘り下げられること、それを追究するなかで、自らの仕事に還元できることにある。そのダイナミックさは、経験した者でしか味わえない。

3. 仕事と研究の相乗効果

2015年6月に博士（経営学）を取得し、その1年後には、博士論文をベースにして、洗練化、コンパクト化、普遍化を図り、博士論文の出版化に向け傾注した。そして、2017年9月、水曜社より『グローバル創造経営—現地に根付く日系企業の挑戦—』を上梓した。

リストラ後に、コーチングを中心とした経営支援、組織開発コンサルティング、部下育成の研修企画などを行う会社を起業した。お陰様で仕事もクライアントの信頼を得て順調である。

仕事に追われ、研究が疎かになった時もあった。そんな時に声をかけて下さるのが恩師の十名先生である。ある時メールをいただいた。「コーチング論を、現場視点から問い直し、深めてほしい。企業研修や大学・看護学校で、企業人や学生と交流されていますね。そのいくつかの事例を取り上げ、そこで彼らが求めていることは何かを具体的にピックアップする。それを、理論的に捉え直し、深めるのです。その際、先行研究の視点、およびあなたの知見ではどこまで応えられるのか。何を深めるのか、独自の視点は何か、を探り出すのです。現場に学ぶ、現場研究とは、そういうものだと思います」何とも有難い言葉である。

このメールをきっかけに、十名先生を中心に開催するオンラインの「働学研（博論・本づくり）研究会」にできるだけ参加し、国際文化政策研究教育学会にも入会して、論文を投稿することもできた。さらに、十名先生からのご紹介で2023年春学期からは、SBI大学院大学の経営学講義も担当している。

働きつつ学び研究することの出会いが、まさに筆者の人生を切り拓いているのである。

4. 働きつつ学び研究することはセルフマネジメント

筆者の経験をここまで述べてきたが、働きつつ学び研究することは、セルフマネジメントを修得することにつながり、また修得しないと継続できない、と考えている。

不確実で混沌とした時代。この時代を生き抜くのは、セルフマネジメント力をつけることが、経営者側にも働く側にも必要といえよう。セルフマネジメントとは、広辞苑で調べると、セルフは「自分自身で」マネジメントは「管理」とある。直訳すると、自分自身で管理するという意味になる。筆者は、セルフマネジメントとは、自己理解を深め、自己を管理し、自らの能力を最大限に発揮し、パフォーマンスを上げることと考える。

働きつつ学び研究することは、自らの仕事と向き合い、現場で感じる問題意識を探究することである。それは、自らを問い、創造することであり、このプロセスは、セルフマネジメント力なしにはできないと考えている。

具体的には、①目的・目標意識、②俯瞰力や大局観、③時間管理、④情報管理、⑤健康管理等のセルフマネジメントが養われると考える。

- ① 目的目標意識では、何のために働くか、研究するかを常に自らに問い、そのために何をするかを考えること。つまり、自らの理念を持ち、ビジョンを描くことである。この軸がないと働くことも、研究することもブレが出てしまう。
- ② 俯瞰力や大局観でものごとを見ることは、仕事する上でも研究する上でも必要な視点である。筆者がそうであったが、気をつけないと研究を進めるとどうしても細部に入り込んでしまう。独りよがりになり、ものごとのよい側面しか見ようとせず、その影を見落としてしまう。この点を補うには、自らの俯瞰力や大局観を養うことが求められる。
- ③ 時間管理は、働くこと、学び、研究する時間をどうつくるかである。常に時間の使い方を見直すこと、まとまった時間をつくること、有限な時間をどう使うかは常に私たちに問われている。
- ④ 情報管理も、いい文献に出会うかのアンテナを立てること、その情報を整理し、常に活用できるよう準備をすることも必要である。後で記録しておけばいいと思うと、忘れてしまい、時間の浪費にもなりかねない。
- ⑤ 健康管理は、働く上でも、研究する上でも必須である。とくに、感情と思考の健康である。働く上でも研究する上でも、自分のできていないところばかりに目を向けることは、発展がない。強みと弱みを受け止めつつ、感謝の気持ちで前向きに仕事も研究もできるかは問われるところである。

5. おわりにー人生の主役にー

恩師に恵まれること、一緒に研究する仲間にも恵まれること、働きつつ学び研究する環境にも恵まれること、これがないと進めたくても進められない。それらに恵まれていることに感謝しつつ、セルフマネジメント力を身につけていくことである。

人生の主役になるためにお互いに切磋琢磨していきましょう。